

カンボジアにおける教育支援および教育実態調査

文学部人文社会学科 心理学専攻 4年

麻生 諒也

1. 活動に至った経緯と活動概要

私は大学2年次のアメリカ留学中、先進国での貧困を目の当たりにした。宗教や人種問題、貧困など社会的、経済的格差が根強い経済大国で、大人から子供まで生きるために物乞いをする現実を目の当たりにし大きな衝撃を受けた。この時に初めて、社会的弱者の貧困に興味を持ち、子どもの貧困に目を向けた。自らの力では現状を打破できない、身を置く状況に左右される子どもの機会の不平等さに興味を持ったからだ。とりわけ、各家庭の経済状況が顕著に影響を及ぼす教育格差問題に関心を持つようになった。こうした背景から、経済的不安定な状態にある発展途上国の教育現場の現状を学びたいと考えた。

アメリカから帰国後の大学生活では、日本の教育格差や女性差別など不平等格差を学び、徐々に大学院で国際教育開発を学びたいと考えるようになった。そこで、発展途上国の教育事情を知ることは、私の本当に研究したい分野を明確にさせる事に繋がると考えた。以上の経緯から、カンボジアでの教育ボランティア活動に挑戦し、今回奨学金を得るに至った。

活動概要に至っては、「Project Abroad」と呼ばれる機関を通じて、教育ボランティア活動に参加した。2月6日～3月8日までの約1か月の間、カンボジアのプノンペンにある学校にて、英語の先生を担当し6歳～12歳の子ども達を対象に初級英語(have と has の使い分けと～ing の使い方)を教えた。また、プロジェクトを通じて、子ども達の教育水準や先生の質、教室環境を学んだ。休日には、カンボジアの負の遺産であるキリングフィールドとトゥールスレン虐殺博物館への訪問を通じた現在の教育に関する歴史探索や、プノンペン市内に点々とある市場にて生活環境、物価等を見学した。

2. 事前学習内容

今回ボランティア活動を行う、カンボジアは2000年代に高い経済成長を続けている国(外務省, 2018-a)である。2004年から2007年まで10%を超える経済成長率を記録した(International Monetary Fund, 2019)。2009年には0.1%まで落ち込んだものの、2011年から2015年まで7.0%以上安定した経済成長を続けている(International Monetary Fund, 2019)。また、そうした変化に伴って、Ly, Sodeth., & Sanchez Martin, Miguel Eduardo.(2016)のデータによれば、2004年には人口の約15%が極端に貧困状態であるとされていたが、2012年には約1%にまで減少した。しかし、経済的不安定である人口は2004年の約30%から2012年の50%まで約20%の増加が見られた。

そうした経済的背景を踏まえて、カンボジアの教育について述べる。外務省(2018-b)によると、カンボジアでは初等教育から前期中等教育まで、9年間の義務教育を受けることが憲法によって規定されている。ユニセフ(2017)によれば、2016年時点での初等教育(6歳：第

1 学年～11 歳：第 6 学年)の就学率は約 95%，前期中等教育(12 歳：第 7 学年～14 歳：第 9 学年)の就学率が男性 44%，女性が 49%と示されている。こうした背景には，地方農村部では子供が貴重な労働力となっているため，義務教育課程においても，出席日数が足りずに留年する児童が多くなっている(外務省，2018-b)ことが理由として考えられる。

カンボジアには公立学校と私立学校がある。Ministry of Education, Youth and Sport(2016-a)によると，公立の小学校は 7085 校，中学校が 1251 校。一方で，私立の小学校は 357 校，中学校は 43 校である(Ministry of Education, Youth and Sport, 2016-b)。また，費用に関して，前者では制服や学用品等は保護者負担となるが，教育費は無料となっている(外務省，2018-b)。後者は私立学校の一例として，Northbridge International School Cambodia(2019)のホームページによると，学年にもよるが生徒 1 人につき年間 US\$16,010～\$21,680 の費用がかかる。

また，教師不足を理由に教育システムが学校によって大きく異なる。公立小学校では，教師数 44,884 人に対し，子どもの登録数は 2,010,673 人である(Ministry of Education, Youth and Sport, 2016-a)。つまり，1 人の教師が約 44 名の生徒を教える計算になる。また，学校あたりの生徒数を計算すると 1 学校につき，283 人も生徒が在籍することになる。よって，2018 年時点のカンボジア公立学校では，より多くの子ども達に授業を行うために，午前／午後の二部制授業の実施が強いられている(外務省，2018-b)。また，不十分な学習時間を補うため，放課後に民間の学習塾に通ったり，同じ学校の先生が有料で学習指導したりしているケースがある(外務省，2018-b)。一方で，上述した Northbridge International School Cambodia では，2 歳～18 歳までの生徒，合わせて 935 名が在籍しており，1 人の教師が約 10 名の生徒を教えている。更に，カンボジアの先生だけでなく，イギリスやアメリカなど 18 カ国もの異なるバググラウンドを持つ先生が指導にあたっている(Northbridge International School Cambodia, 2019)。また，二部制授業の実施はなく，7:30 登校から 15:30 下校と記述されている(Northbridge International School Cambodia, 2019)。

3. 活動目的

以上の事前学習を踏まえて，今回，教師，教室不足や経済的な問題から子ども達に強いられている不十分な学習時間を補うための学習塾において，約 1 ヶ月間の英語教師として，教育ボランティア活動に取り組む。そして，「発展途上国の一例を観察，体験する事で，発展途上国の現状を把握し，子ども達の教育に対して今，何が求められているのかを私なりに考察すること」をこの活動の目的として設定した。

4. 主な活動地域

渡航先はカンボジアの首都，プノンペン。滞在先は Project Abroad が管轄するアパートメントで，プノンペン国際空港から車でおおよそ 20 分，セントラルマーケットから Tuktuk と呼ばれるバイクに旅客用の荷台が付いた車両(以下，Tuktuk)でおおよそ 20 分の場所に位置

している。活動先の学校はアパートメントから Tuktuk で 20 分ほどの距離に位置する。見学場所は負の遺産であるキリングフィールドとトゥールスレン虐殺博物館。訪れた市場はセントラルマーケット，オルセーマーケット，ロシアンマーケットやナイトマーケット。

滞在先：PA Apartment

滞在先住所：54A, Street 608, Sangkat Boeung Kak II, Khan Tuol Kork Phnom Penh Cambodia

活動先施設名称：Vocational and Development Training Organization

活動先施設住所：#676, St 76c, Sangkat Steng Meanchey Khan Meanchey, Phnom Penh City, Phnom Penh Cambodia

5. ボランティア活動の流れ

5-1. プロジェクトの主な流れ

1 日目(2 月 5 日)：日本発

2 日目(2 月 6 日)：プノンペン到着→アパートメントへの送迎

3 日目：オリエンテーション

4 日目：教育ボランティア活動の開始

28 日目(3 月 6 日)：ボランティア活動終了，現地調査

30 日目(3 月 8 日)：現地調査終了→プノンペン発→日本到着

5-2. プロジェクト中の 1 日の主な流れ

基本的に平日はボランティア活動，土日は休日だった。平日一日の流れに至っては，毎朝，学校へ向かう Tuktuk の出発時刻が決まっているため，その時間に合わせて行動していた。学校についてからは鐘の合図で授業が始まり，英語の授業は 45 分の授業を 15 分の休憩を挟んで 2 回行い午前中が終了となる。カンボジアはお昼休憩を長く取る文化がある為，アパートメントに一度帰宅し食事をとってからもう一度学校に行き，午後の授業を教えた。子ども達に関しては，午前中の授業に出席して，午後の授業にも出席する子は比較的少ないが，そのような子は同様に一度帰宅してから戻ってくる。

07:00	起床、朝食
08:00	学校へ出発→午前の授業開始
09:00	
10:00	
11:00	帰宅、昼食、休憩
12:00	
13:00	他のボランティアと交流や、午前の授業の反省と変更、午後の準備
14:00	
15:00	学校へ出発→午後の授業開始
16:00	
17:00	
18:00	帰宅、休憩
19:00	夕食、他のボランティアと交流
20:00	
21:00	午後の授業の反省と変更、翌日の準備
22:00	
23:00	シャワー、洗濯
00:00	就寝

図1 ボランティア講師の主な平日の流れ

5-3. ボランティア講師の1週間の流れについて

ボランティア講師の一週間の授業スケジュールについては以下の図に参照してある。基本的には月曜から木曜日は「Up and Away」と呼ばれる教科書に沿って授業をする形（木曜日はWritingやConversationと書いてあるが、Up and Awayを教えるように指示があった）となるが、違う授業を希望すれば、教科書に沿う形でなくても良い。金曜日は子ども達の間で「Fun day」と呼ばれ、授業以外の事(サッカーやお絵かきなど)をすることができる特別な日で、子ども達が楽しみにしている日でもある。基本的には、午前中と午後で子ども達が変わるので、同じ授業を行うように指示されている。

Morning Class					
TIME	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY
8:45-9:30	Up and Away	Up and Away	Up and Away	General Topic/Writing	
9:30-9:45	Break Time	Break Time	Break Time	Break Time	Break Time
9:45-10:30	Up and Away	Up and Away	Up and Away	Conversation/Singing	Reading/Dictation

Afternoon Class					
TIME	MONDAY	TUESDAY	WEDNESDAY	THURSDAY	FRIDAY
3:15-4:00	Up and Away	Up and Away	Up and Away	General Topic/Writing	
4:00-4:15	Break Time	Break Time	Break Time	Break Time	Break Time
4:15-5:00	Up and Away	Up and Away	Up and Away	Conversation/Singing	Reading/Dictation

図2 ボランティア講師の予定

6. ボランティア活動の詳細

6-1. 教育環境と学校に通う子ども達について

前述したが、カンボジアには「公立／私立学校」と「学習塾」があるが、私は Project Abroad が管轄する学習塾で1ヶ月間、英語教師として2つのクラスを担当した。

カンボジアに到着した翌日に初めて学習塾に訪れた。プノンペンの比較的発展した都市からさほど遠くないにも関わらず、大通りから一本道を曲がった先にあるボランティア活動先の塾は周囲に異様な臭いが漂っていた。学校の中には小さな教室が5つ。英語力によって1～6levelのクラス分けがなされ、1つの教室に2クラスが同時に、同じホワイトボードを使って違う授業を行っている。先生は1教室に1人で、2クラスを同時に教えている。ボランティアの人がいれば、そのクラスでは2人の先生が各々のクラスを教える状況である。現地の先生の英語力はお世辞にも高いとは言えない。授業はOxford出版の英語の教科書(up and away)を元に行われた。

授業中のカンボジアの子ども達は、日本の子ども達と類似して、真面目な子と不真面目な子に分かれる。前者は非常に少なく、大多数が後者の生徒であり、お絵かきや、お喋り、他生徒へのいたづらが目についた。さらには、長椅子に3人程座って密集した状況で授業を受けるせいか、多くの子ども達が誰かのノートをコピーしていた。



図3 授業風景(通路を挟んで、左がLevel1, 右がLevel2)

私が担当したクラスはLevel2(上図の右側の生徒)で6歳~12歳の生徒達だった。生徒の教育水準は決して高いとは言えない。私は英語の授業のみに従事したわけだが、Level2の大半の子ども達の英語力はI(私)を使った簡単な英文のみ理解できるくらいである(ex. I like an apple, I love you)。クラス分けされているものの、生徒の中には複雑な文を理解して話せる子もあり、できる子とできない子の差が大きかった。

授業自体はボランティア活動者に裁量権があるため、私は教科書に沿った内容で英会話中心の授業を展開した。1か月で教えた具体的な授業内容は“have vs has(三単現の不規則変化)”と“be ~ing(現在進行形)”と、英語の中でも初歩的な単元であった。

また、私がボランティアしていた学校は英語だけでなく算数、国語、エクササイズの授業も行っていた。国語は現地言語であるクメール語で読解や音読の練習をしていた。算数の授業ではLevel2の子ども達は $2 \text{ 桁} \div 1 \text{ 桁}$ の計算を主に勉強していた。前述したが、基本的には英語のレベルによってクラス分けがなされている為、6歳や12歳の子ども達が同じ計算問題に取り組んでいたのには少々違和感があった。エクササイズの授業はラジオ体操第一に似ているような体操をしていた。

6-2. 子ども達の生活様式

子ども達の生活様式は様々だった。午前の学校に登校し、午後は家のお手伝いをする子もいれば、午前、午後の両方の授業に出席する子、午前に違う学校に登校してから、午後の授業に出席する子など、家庭によって異なっていた。一番多いのは午前・午後のどちらかの授業に出席し、家のお手伝い(弟妹の面倒を見るなど)をする子である。中には違う学校をメイ

ンに通っている子もいた。

6-3. 子ども達の衛生状況

子ども達の衛生状況は非常に悪い。子ども達と手を繋ぐと1日で手に水疱ができたり、子ども達の足は常に汚れているし、前歯に虫歯があったり、前歯がない子もいる。私と同じアパートメントに住む、公衆衛生プロジェクトのボランティアの方々が週に1度、私の学校に公衆衛生教育に来るが、彼らが言っていた話では「虫歯が多く、歯磨きの文化がなければ歯磨きの仕方を知らない子どもが多い。きっと教えてもらえないだろう。それに、毛じらみも多く、髪をしっかりと洗っていない子どもが大半だね」と。授業を欠席する子も多く、ほとんどが体調不良だった。

6-4. 子ども達の学習の進捗状況

1か月の教育支援を通じて、私が特に強く感じた教育格差とは、同じクラスメイト同士の学力の差である。前述の通り、クラスは学力によって分けられているが、中には英語が得意な子と、苦手な子がいる。英語の理解が乏しい子は英語の授業に楽しさが見いだせない。更に、わからない事を理解しようとしなければ、英語が得意な子や先生に質問することも無い。「きっと理解してくれてないんだろうな」と思い、「Did you understand what I said?」と聞くと「Yes」と答える。隣のカンボジアの先生にお願いし、クメール語で「理解した?」と聞いてもらおうと、「Yes」と答える。しかし、その後、小テストで理解度を確認してみると、半分以上の生徒が理解していない。一方で、英語が得意な子は、積極的に発言したり、「Homework please」と宿題をもらったりしに来る生徒もいた。

1か月必死に教え、休み時間に教えることもあったが、私の帰国1週間前の理解度テストでは、教えた子たちの平均点が2点(10点満点)だったことには、やるせない気持ちになったのを覚えている。英語が得意な子は7,8点と高得点を取るのだが。違うレベルを教えるデモンマークの同僚に相談したが、彼女のクラスも同じような点数だったと言っていた。

私自身の教師能力(教師の質)や子ども達の学習意欲を起因とする、英語ができる子とできない子の学力の差はたった1ヶ月だが、広まっていると感じた。

6-5. 番外編：子ども達の夢

1週間に1度英語ではない授業を教えることができる。同僚のボランティアは色々な国の文化を教えたりしていたのだが、私は「将来の夢」という授業を行った。カンボジアの子ども達はどんな夢を持っているのか興味があった。子ども達に将来の夢を絵で描いてもらった。以下がその絵である。



図4 子ども達の将来の夢

子ども達の中で多かった夢は「サッカー選手」「教師」「医者」であった。やはり、男の子はサッカー選手、女の子は教師か医者といったところだろうか。今現在、カンボジアのサッカー代表チームは元日本代表の本田圭佑選手が監督を務めていることもありサッカー熱が強い。一番興味深いのは、子ども達の中には「Youtuber」になりたいという子が少なからずいたことである。日本の子ども達の夢に Youtuber があるように、子ども達の「夢」は万国共通なのだろうか。

7. カンボジアの歴史と教育水準の結びつきについて

次に、カンボジアの教育実態を紹介した後に、現在のカンボジアの教育状況をより深く理解する上で欠かせないカンボジアの歴史について紹介したい。

カンボジアには負の遺産と呼ばれる場所がある。「キリングフィールド」と「トゥールスレン虐殺博物館」である。両者は約40年前に起こった、共産主義者であるポル・ポトにより執り行われた住民大虐殺における処刑場と処刑前収容所である。今では観光地となっているが、同時に過去の大事件を学ぶ博物館となっている。

エバ・ミシリビエッチ／監訳・栗野鳳(1992)によると、1975年、ポル・ポト政権は、カンボジアに伝統的な、農業を主とした階級のない社会を復活させ、人々の生活水準を高めると約束した。そうして、同年、プノンペン市内を制圧し、市民に持てるだけの食料だけ持た

せて、全市民を田舎へ追い立てた(エバ・ミシリビエッチ／監訳・栗野鳳, 1992)。また、ポル・ポトが自らの政治体制に批判的な態度を取り得る危険因子を排除したかったために、わずか4年の間で人口の3分の1を処刑する大虐殺が行われ、弾圧された人々は主に、医者、教師、パイロット等の知識人や技術者、更には眼鏡をかけている人でさえも対象となった。たった40年前に行われた凄惨な事件だとは想像できない程、心苦しくなる非人道的行為であった一方で、こうした過去が現在に至る教師不足を招く一要因となっている。

その後、1978年12月、ベトナム軍はカンボジアに電撃侵攻し、翌年1月首都プノンペンを陥落させた。ポル・ポト政権後、ヘン・サムリン政権では、カンボジアのほとんどの行政部門がベトナム人顧問による指導下に置かれた(Vichet Ratha Khlok, 2003)。ベトナムは学校教育の再会、教育制度の再建に技術援助を与えたが、それはベトナム語使用など、カンボジアのベトナム化政策を意味していた(Vichet Ratha Khlok, 2003)。また、反ベトナム勢力である民主カンボジア三派連合との内戦が10年間くり返された(外務省-c)。1989年には、東西冷戦構造に終止符が打たれ、ベトナム軍がカンボジアから完全撤退すると、教育分野では、西側諸国が新たに高等教育機関を援助することによって、カリキュラム内容が大幅に変更し、教授用語がロシア語、ベトナム語から英語、フランス語に変わった(Vichet Ratha Khlok, 2003)。

以上の出来事踏まえると、今日に至るまで、教師不足が起こっている現状は、ポル・ポト政権における大虐殺だけでなく、ベトナム教育化や内戦によって、カンボジアの教育整備が遅れたことも十分に考えられる。

7. カンボジアの人々の生活環境について

7-1. 住居の違いについて

教育とは異なる観点について説明したい。プノンペンの人々は、大きな庭付きの豪華な家に住む人、日本と変わらないような家に住む人もいれば、ドアがなく吹き抜けのトタン屋根の家に住む人まで様々であり、住人の生活水準が一目でわかる。プノンペンの中心地であるセントラルマーケットのエリアでは比較的大きく豪華と言えるだろう家が立ち並ぶ道がある一方で、そこから歩いて数分もかからない小道には普通の民家やアパートなどがある。



図5 アパートメントからの風景



図6 スラム街の風景

7-2. スラム街の生活環境について

ただし、線路沿いのスラム街と呼ばれる所は少し雰囲気が違う。服を着ていない子どもや、伸び切った服を着ているみすぼらしい大人が見受けられた。野良犬や鶏がそこら中を歩いており、プノンペン以外のどの場所よりも多く生息していた。スラム街の家の形状は、図5に見えるアパートや一軒家の形ではなくトタン屋根の家が多く、ドアはなく吹きぬけている。外には生活ごみが散乱し、野良犬や鶏がそれを食べていた。また、1人の大人がゴミ山から何かを探している姿も見えた。

この地域では、観光客が訪れることがあまりないのか、非常に物珍しそうに私を見る現地の人々が多かった。また、Project Abroadのコーディネーターの方から、携帯を外に出さないようにと注意されていたが、携帯を外に出して写真を撮るのに夢中になっていると、座っていた2人の男性と1人の少年が後ろから近寄ってきた。友人の声のおかげで近寄ってきている男性に気づけたが、何かされるかもしれない非常にスリリングな体験をした。とりわけ、この地域でスリに合う人も少なくない事を後になって聞かされた。

7-3. カンボジアの水事情について

カンボジアの水道は一見透明で綺麗そうな水が通っている。しかし、衛生面の理由から飲料用として利用することができない。Project Abroadのコーディネーターから水を飲むときには、ミネラルウォーターを飲むように指示を受けた。



図7 アパートメントの水道水



図8 河川敷の風景

7-4. カンボジアの買い物事情について

食料品や生活必需品等は主に市場やスーパーで手に入れる事が可能である。セントラルマーケットやロシアンマーケット、ナイトマーケットと呼ばれる大型の市場から、路上で売り買いできる露店まで限りなく存在する。大きな特徴は売値の表示がなく、値段の交渉が可能な点であり、スーパーと同じものが売られているが、比較的安く購入することが可能である。例えば、有名ブランドのフェイク洋服、歯磨きや口内うがい薬、洗剤までが数百円の単価で売られている。

また、スーパーとは日本にあるものをイメージするのが良い。商品の陳列など日本と類似している点が多く見られた。中には日本で売られているお菓子もあった。異なる点と言えば、カエルや見慣れないフルーツ(ドラゴンフルーツやパッションフルーツなど)が売られていたりしていた事である。更には、入り口にガードマンが見張っており安全性が確保されている点も相違点だと思う。なお、カンボジアにある最も大きなスーパーは日本でもお馴染みイオンモールである。以下にマーケットとスーパーの違いを写真で紹介する。



図9 マーケット①(様々な商品が陳列され、日本語の商品も見える)



図10 マーケット②(子ども服から大人服、男性用や女性用幅広く取り揃えている)



図 11 露店①(焼けている食べ物は、鶏やカエルなど)



図 12 露店②(見たことない野菜から魚まで様々売られており、周囲は異様な臭いが漂う)



図 13 スーパー①(日本でもお馴染みのリンゴ等の果物が多く売られている)



図 14 スーパー②(日本では見れない珍しい果物も多くある)

7-5. 交通事情について

カンボジア国民の基本的な交通手段は、“車”“バイク”“Tuktuk”である。その他にも列車やバスも通っているが、主にシェムリアップや海沿いのビーチなど、比較的遠方の地域に行くために使用される。また、道路は車やバイクの往来が非常に激しく、交通ルールが機能していないように見えた。信号や停止線が無視される場所があったり、1車線にバイクが数台ずらりと並び、歩行者用と思われる道にすらバイクが乗り上げてきたり、歩行者からすれば非常に危険である。更に、バイクや車のクラクションが鳴りやまない。現地のドライバーから聞いた話だが、先に通る時や道を開けてほしい時に、歩行者や前方車両、対向車両構わずに鳴らすらしい。

余談だが、歩行者は道路を横切る時、迫ってくる車両との間隔を把握し通れると思えば“歩いて”横切るのが一番安全らしい。バイクや車がスピードを落としたり、避けて通ってくれるからである(走られると運転手は避けづららしい)。



図 15 Tuktuk からの景色

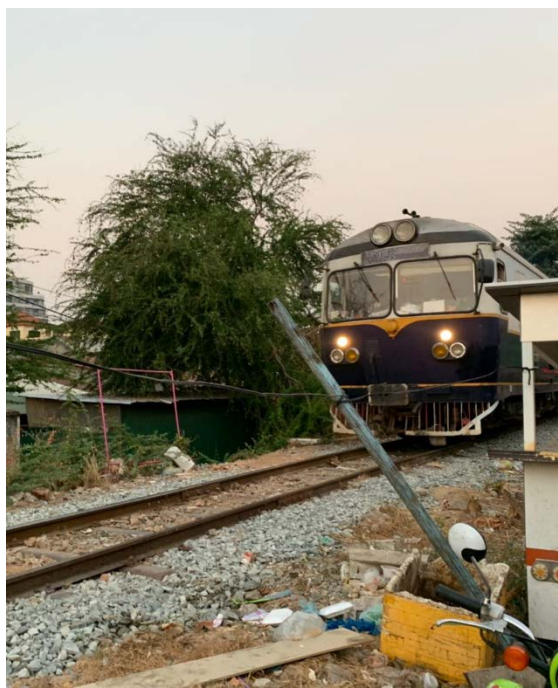


図 16 鉄道

7-6. ストリートチルドレンについて

プノンペン市内で、ストリートチルドレンに会う機会があった。しかし、親と同伴で服装の身なりも家がないとは想像できないくらい普通だった。ただ、生活している場所は路上に布団を敷いただけの雨風を凌ぐ屋根もない、まさに野ざらしの状況だった。彼らに出会って驚いた事は、お金や食べ物を恵んでほしいなどと歩み寄って来ないことだった。家はなかったが、生活できている様に見受けられた。

一方、都市部から南に離れた地域で出会ったストリートチルドレンは衝撃的だった。前述

した負の遺産となっているキリングフィールドの土地で、2人の子どもがフェンス越しに小さい手を差し出しながら、クメール語で話しかけてきた。手にお札を持っていた為、おそらくお金を欲しいと言っていたように思えた。アメリカで私が経験した物乞いと似たような状況で、大人ではなく子ども達がそうせざるを得ない状況に立たされていることを強く痛感させられた出来事であった。

7-7. カンボジアの人々の生活のまとめ

カンボジアの人々の生活の違いを住居、買い物などの視点から見た。プノンペンの生活実態を見ると、実際に住んでいる人々の経済的な生活水準が推測できる。スラム街にあったトタン屋根の家や庭付きの大きな家、日本でも良く見られるような普通の家など、人によって住む環境が大きく異なっていた。また、路上で水や食べ物を売って生計を立てる人もいれば、会社に勤務している人もいる。更には、誰かからお金をもらって生活する人もいる。2011年から2016年まで安定して約7%の経済成長を続け、2017年以降は推定値となっているが6.8%以上の経済成長率が見込まれている(International Monetary Fund, 2019)。数値だけ見れば、著しい経済発展を遂げており、多くの人々が日に日に裕福になっているように読める。しかし、実際は路上でお金を稼がなければならない人と会社勤務する人の両者が多く見受けられ、低所得者と高所得者の間に格差があるのではと考えた。また、こうした所得格差が、塾にだけ通う子がいたり、午後には親の手伝いをしたりしなければならないと言っていた一つの理由ではないかと推測できる。

8. 総括

本活動の目的は、発展途上国の一例を観察、体験する事で、「発展途上国の現状」を把握し、子ども達の教育に対して「今、何が求められているのか」を私なりに考察することであった。

事前調査として、毎年、経済成長を続けており(外務省, 2018-a)、一方で経済的不安定の世帯が増加傾向にあることを学んだ(Ly, Sodeth., & Sanchez Martin, Miguel Eduardo., 2016)。また、カンボジアの教育については、初等教育の就学率が非常に高く、子を持つ親の収入はおそらく十分ではないが、学校に行けている子どもが多いのではと考えた。また、通常の学校に加えて塾に来る子ども達は、きっと勉強をさせてもらっている身にあって、親に感謝しながら意欲的に取り組んでいるのだろう考えた。以上のように、カンボジアの教育に対するイメージを湧かせてからボランティアに参加した。しかし、現実には想像していた状況よりも少々異なっていた。冒頭で前述した通り、子ども達の勉強に対する意欲の低さが顕著だった事だ。私のクラスは6歳の子や7,8歳の子が多く在籍していたため、将来のことや勉強に対して意欲的になるのは難しいかもしれない。しかし、12歳の生徒でさえ、意欲のある子は一割程度だった。更には、他クラスの12歳を任せられているボランティア講師も同じようなことを思っていたのを知り、私のクラスに限った問題ではなかったことを知った。授業中

の私語やお絵かきは当たり前の状況であった。また、授業を受ける環境も想像を絶していた。まさか1つの教室で2つのクラスが同じホワイトボードで授業しているなんて考えもしなかった。公立学校では教師が足りてないために、午前／午後の2部制になっている現状を学んだ(外務省, 2018-b)。しかし、学習塾では午前／午後で分けられていても、教師と教室が足りていなかった。教室の増加は高い学歴を持った教師と同様に、今カンボジアの学習塾で強く求められていると考えられる。

上記の内容を踏まえつつ、今回のボランティア講師活動を通じて、私なりに考察した結果として2つ、カンボジアに求められているのは「子ども達の学習環境を整えること」と「子ども達に自発的な学習を促すこと」であると考えた。

前者の学習環境とは、2つの考え方がある。まず、学校に通える環境を整えることである。公立学校費が無料にもかかわらず、ストレートチルドレンのように学校に全く通えていない子どもや、学習塾にしか通っていない子ども達がいる。つまり、親の経済状況や仕事の手伝いを理由に学校に通えていない子がいる。こうした、通いたくても通えない子ども達を減らすことが就学率を上げることに繋がる。

次に、教室の環境を整えることである。まずは、簡単ではないが、学校や教室を増築することである。1つの教室に2つのクラスが違う授業を受けている環境は早急に改善すべき点である。また、隣の子のテストをカンニングしたり、お喋りしたり、いたずらしたりできてしまうのは授業に適した環境ではない。長椅子ではなく生徒一人一人が1つの椅子に座って1つの机の上で勉強できるようにする学習環境の改善が課題である。

一方、後者は、子ども達に勉強の重要性和楽しさを認識させることで、自発的な学習を促すことである。今回のボランティア活動を通じて、子ども達の学習意欲の低さが問題だと考えた。更に、学習意欲が低い原因には、毎日同じ教科書を使用した授業のマンネリ化や、学力レベルに見合わない授業、学習の重要性の欠如などが考えられた。

そのために、まずは、経済的に余裕がないかもしれないが、様々な教科書、電子機器などの豊富な教材を使用できるようにすること。例えば、クメール語で書かれた英語の教科書を使用することで、学力差のある子ども達にも英語を満遍なく理解してもらえる。

また、教師数の増加も重要だが、子ども達に興味関心を持たせる授業展開ができる教師の育成も重要ではないだろうか。今回のボランティア活動では、現地教師の英語の授業が教科書に沿うだけの授業であり、教師の英語力も高くはなかった。やはり、そのような授業では、子ども達に理解されづらく英語に興味も持てない。

以上のように課題は山積している。お金のある家庭やない家庭、全ての家庭が等しく同じ学習環境の元で、質の高い授業を受けられる状況を作る為に、今の段階ではまだ文字通りの発展途上である。



図 17 午前のクラスの子ども達



図 18 午後のクラスの子ども達

9. 今後の指針

教育ボランティア活動という貴重な体験を通じて、今後の指針を明確にできた。それは、教育開発学部のある大学院に進学するということである。

今回のボランティア活動では、学習塾ではあるが、授業を受けている子ども達が多いことを学んだ。しかし、授業を二部制にしたり、1つの教室で授業を2つ同時に行ったりなど、その数に見合わない教室不足や教師不足が顕著だった。教室の増築等に加えて、様々な教科書の使用など課題は多いが、教育の質を高めるために、私が一番問題だと考えた点は、子ども達の学習に対する意欲の低さである。ここで述べた教育の質とは、学業成績や識字能力、進級や卒業など、教育の結果として現れた成果(黒田・横関, 2005)である。また、杉村(1982)は小学生における学習に対する内発的意欲は学業成績にかかわる強力な要因であることを述べた。つまり、教育の質(子ども達の学業成績)を高めるために、子ども達の学習意欲を高めることは重要な要因だと考えられる。

以上を踏まえて、大学院では途上国の義務教育課程において、教育の質を高めるために行われてきた政策や子ども達の学習意欲に関する知見を増やし、それに関わる研究がしたいと考えている。よって、大学院では、International Development and Education の分野に進み、今後も国際協力分野に携わっていきたい。

引用文献

- エバ・ミシリビエッチ／監訳・栗野鳳(1992) NGO が見たカンボチア JVC 国際共同出版.
- 外務省(2018-a) カンボジア王国 (Kingdom of Cambodia) 基礎データ
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/cambodia/data.html#section1>.
- 外務省(2018-b) 国・地域の詳細情報 (平成 30 年 1 月更新情報) カンボジア王国
https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/infoC10300.html.
- 外務省(2018-c) カンボジア総選挙 民主化に向けた日本の支援
<https://www.mofa.go.jp/mofaj/press/pr/wakaru/topics/vol3/>.
- International Monetary Fund (2019) World Economic Outlook Database : Cambodia, April 2019.
- 黒田一雄・横関祐見子(2005) 国際教育開発論：理論と実践 有斐閣.
- Ly, Sodeth., & Sanchez Martin, Miguel Eduardo. (2016) Cambodia economic update : enhancing export competitiveness the key to Cambodia's future economic success (English) World Bank Group.
<http://documents.worldbank.org/curated/en/575221480949830789/pdf/108982-WP-ENGLISH-P148100-PUBLIC-FinalCEUOctoberEnglish.pdf>.
- Ministry of Education, Youth and Sport(2016-b) Education Statistics and Indicators Private Schools 2015-2016
<http://www.moeys.gov.kh/index.php/en/emis/2230.html#.XLGbeE3duLD5>
- Ministry of Education, Youth and Sport(2016-a)The Education Statistics and Indicators 2015-2016
<http://www.moeys.gov.kh/index.php/en/emis/2222.html#.XLL9gXduLD4>
- Northbridge International School Cambodia(2019)
<https://www.nordangliaeducation.com/en/our-schools/cambodia>.
- ユニセフ(2017) 世界子供白書 2017
https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/UNICEF_SOWC_2017.pdf.
- 杉村健(1982) 小学生における学習意欲, 知能および学業成績 奈良教育大学教育研究所紀要 18 巻 p. 101-108.
- Vichet Ratha KHLOK(2003) ポル・ポト後カンボジアにおける教育システム再構築に関する一考察 : ベトナム化と再クメール化の過程に注目して 教育学研究 70 巻 3 号 p. 383-392.